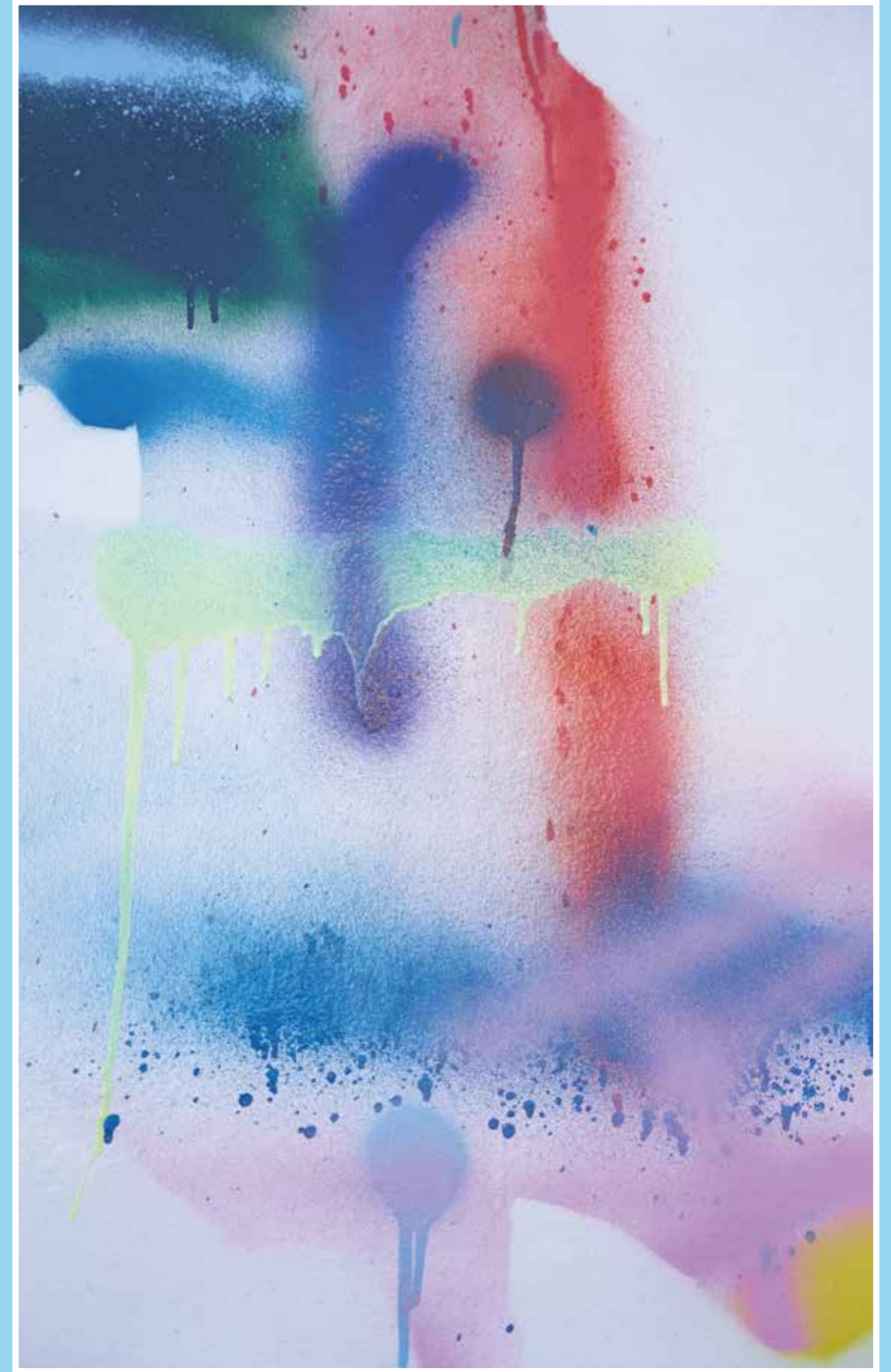


$$\bigcirc + \triangle + \square = \bigcirc$$



港まちづくり協議会 2022年度報告書

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN
ANNUAL REPORT 2022

Introduction

「6年生になったら壁画が描ける」。港まちでは20年以上続く壁画制作が行われ、思い出づくりを待ちわびる子ども、災害を知る大人、講師を担うアーティストが交わり、「防潮壁プロジェクト」と呼ばれ親しまれています。港まちづくり協議会がこの活動を引き継いで2023年で10年になります。この節目に、これまで様々な人が関わりながら、まちと人々の歴史を繋いできた「防潮壁プロジェクト」のこれまでの俯瞰したいと考えました。完成した壁画からだけでは伝えきれない出来事がたくさんあります。プロジェクトに通ずる想いを、かつての小学6年生や、関わってきた大人、視座を提供するアーティストの言葉を聞きながら、この活動で何が起こってきたのかをご紹介します。

Contents

- 03 防潮壁プロジェクトとは？
- 04 アーティストと振り返る、それぞれのテーマ
- 06 記録する人と考える。
アーティストの言葉って伝わりますか？
- 07 大ちゃんにインタビュー!あれからどうしてる？
- 08 交流の輪が広がっています!
トワイライトスクールでのアーティスト講座
- 09 数字で振り返る2022年度データ



港まちづくり協議会 2022年度WEB報告書
WEB | www.minnatomachi.jp/report/2022.html

※港まちづくり協議会では、冊子版とWEB版の年次報告書をご用意しています。



どんな埋め立て地にする？(2020年度)



地元のお店の旗で壁をいっぱいしよう！(2015年度)



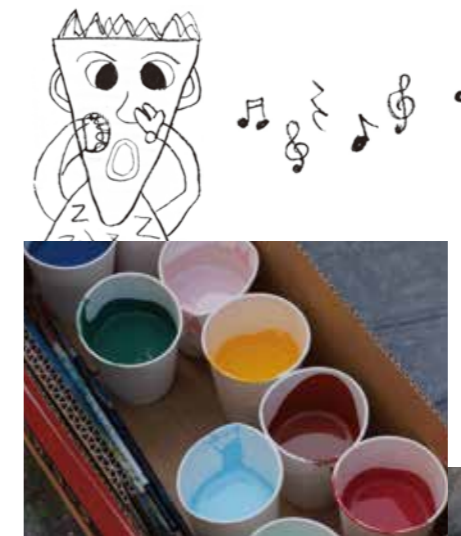
自分よりも大きな顔を描く！(2018年度)



港まつりを思い出しながら…(2016年度)



スプレーで絵を描くなんてはじめて！(2022年度)



カラフルに彩ろう！



紙の上に描くのととは違った感触！



防潮壁プロジェクトとは？

形を変えながら繋いでいくバトン

港特有の構造物である「防潮壁」は、1959年の伊勢湾台風の被害から学び、街を守るために建てられましたが、新しい高潮防波堤が沖合いに作られたことによりその役目を終えました。2002年頃から地域住民が組織するまちづくり団体が中心となり、景観まちづくり事業の一環で「旧防潮壁の修景事業」として名古屋市立西築地小学校の6年生とアーティストが壁画を描くプロジェクトが始まりました。2014年からは港まちづくり協議会がバトンを引き継ぎ、毎年プロジェクトを実施しています。

2018-2019の記録より



開催年によってテーマは異なり、この地域の歴史を学び壁画のデザインに活かす回や、自分自身について深く考え描く回など様々です。例年、壁画に描くモチーフを考えるためのワークショップを2回行ってから、3回目に防潮壁に壁画を描いています。

小学生にとっては卒業制作としての意味合いもあり、壁画はアート作品として約10年間保存され、成人した子どもたちが小学生時代を振り返るモニュメントにもなっています。

ドキュメンタリー of 防潮壁プロジェクト

2018年度から「ドキュメンタリー of 防潮壁プロジェクト」と題し、制作過程の紹介や原画の展示、3日間のプロジェクトの記録映像の上映を港まちポットラックビルで行っています。



テーマとアーティストの軌跡

2014-2015

西築地ハタハタ大作戦！ — 富永敏博

2016-2017

にぎやかみなと祭・はたらくみなとまち — 小林真依

2018-2019

自画像 — 鷲尾友公

2020-2021

あたらしい埋め立て地 — 蓮沼昌宏

2022-2023

いまだ知らない — 横内賢太郎

アーティストと振り返る、それぞれのテーマ 2014-2023



2014-2015

西築地ハタハタ大作戦！

富永敏博

Toshihiro Tominaga



美術作家。絵画制作の他に立体や参加型の作品、ワークショップも開催するなど、鑑賞者と協働での制作活動も行なっている。

西築地小学校の創立100周年を記念し、「未来に残したい港まちの風景」をもとにした旗を描くこと。地元で築地口商店街を中心とした港まちの商店10店舗のご協力をいただき、児童が店主に店の歴史や商品についてインタビューを行うことで壁画のモチーフを探しました。児童にとっては初めて訪れるお店もありながら、各グループで話し合いや聞き取りを重ね、富永さんによる港まちの風景と児童の描いた商店が組み合わせられ、にぎやかな商店街の旗となりました。



2016年は「にぎやかみなと祭」、2017年は「はたらくみなとまち」と異なったテーマで制作。港まちに住む方から、全町内が参加する盆踊りでにぎわうみなと祭の歴史や花火大会のことを伺ったり、名古屋港管理組合の方から名古屋港で行われている仕事について学んだり、児童にとっては改めて自分が住んでいるまちについて考える機会となりました。小林さんが描いた港まちの風景に、児童がそれぞれ思い浮かべる個性豊かな祭・仕事加わり、港まちならではの光景が生まれました。

2016-2017

にぎやかみなと祭

はたらくみなとまち

小林真依

Mai Kobayashi



イラストレーター。誰もがどこかで見た、体験したことがあるような日常をモチーフに、絵画や立体作品、アニメーションなどを制作している。

COLUMN

講師となるアーティストの選考にアドバイスいただいたMAT,Nagoyaの吉田さん、青田さんの話です。

子どもたちと描ければ成功ではなくて、作風やスタイルを活かしながら一緒につくっていくアーティストをコーディネートすることが重要だと思いました。いきなり描き出すんじゃなくて、街のことをリサーチしたりワークショップ



2018-2019

自画像 鷺尾友公

Tomoyuki Washio



グラフィックデザイナー。独学で絵画を学び、街との関係性を軸に人物や事象などと関わり合いながら、イラストやデザイン、アニメーションなどジャンルを問わず、制作活動を人間の自由な行為として捉え表現している。

「自画像」は、本人にそっくりに描くのがゴールじゃない。自分の顔の形や髪の毛の跳ね具合とかを観察しながら描くのも大事だし、自分の性格や感情を線の太さで表現してもいい」という鷺尾さんのアドバイスのもと、自分の顔の特徴を鏡を使って観察。自画像を描くことは、自分という個性と向き合うことでもあります。防潮壁プロジェクトの期間中、児童はそれぞれの個性と向き合いながら自分を表現する練習を重ね、お互いの表現を尊重し合いながらひとつの作品を完成させました。



地域の特徴とも言える「埋め立て地」について考える機会となるようテーマを設定。まずは、バラバラアニメーションや絵本を制作し、埋め立て地の成り立ちやそこで繰り広げられる物語を自ら生み出すことから始めました。そして、防潮壁と同じ大きさの紙に絵を描いてみて、大きな絵を描くために体を慣らしていきましました。埋め立て地にはひとつひとつの異なった物語が内包されていることを共有した上で、児童の好きなものや期待が詰まった壁画となりました。

2020-2021

あたらしい埋め立て地 蓮沼昌宏

Masahiro Hasunuma



美術作家。記録写真家。壁画やキノーラ装置を用いたアニメーション、写真を表現手段とし、物語やイメージの自律性、夢の不思議さに関心を持つ。

を何回かした過程で壁画を描くというのが、子どもたちにとっても重要で。防潮壁が街を知るきっかけになるといいなと思ったので、そういうことも一緒に並走して考えてくれたり、アイデアを膨らませてくれるアーティスト

を毎年推薦しているつもりです。ここ数年は、街の人や学校側も慣れてきて、子どもたちの可能性も見えてきたので、少し抽象度の高い「物語」や「まだ知らないことを絵にしてみる」みたいなことも始まっています。それって



2022-2023

いまだ知らない 横内賢太郎

Kentarō Yokouchi



画家、ASP運営者。光沢のあるサテン布に染料やメディウムなどにより滲みのある独特な画面を作り、東洋に対する西洋の関係性、交わりをあらわにする作品を制作している。



絵を描くことに対して、上手・下手、得意・不得意の意識を持つ人も少なくありません。「いまだ知らない」ものを描くことで、知っているものを描かず、何かに似せて描くのもない体験を目指しました。ワークショップでは、ものや名前からも離れて、形や色などの要素に注目して自分の絵をつくりました。スプレーを用いて偶然に生まれた形や色の重なりから面白さを発見したり、体全体を使って線を描いたり。壁画は個人で、またはコラボレーションして作った型紙を使って描かれました。

COLUMN

記録する人と考える。アーティストの言葉って伝わりますか？

話し手 | 伊東亮太 (記録映像)

書き手 | 大西未来 (港まちづくり協議会)



伊東さんには2018年から防潮壁プロジェクトの撮影をお願いしています。当日の対応に追われてしまう私たち協議会事務局よりも、プロジェクトを見つめてくれていると伝え、即座に「いや、そんなことないですよ、ただの記録です」と伊東さんらしい返答がありました。伊東さんの撮影は、それぞれのアーティストの内容の違いが際立つように、基本的な構成は変えずに編集されています。この報告書冊子も一種の記録。共通点があるかもしれないと思い、どんなことを意識してい

るか聞いてみると、「僕が撮ってるのはあくまでも小学生の卒業制作の記録なので、小学生がメインなことが大事で。この映像は、子どもたちの5W1Hに、アーティストのインタビューがついてるっていうか…。僕としてもアーティストの言葉が聞ける貴重な時間だあって」と、飄々とした返答がありました。伊東さんの撮影は、時にアーティストへ鋭い質問を投げかけながら進み、アーティストは平坦な言葉で理由や考えを話します。映像は児童が成人した際にもう一度見て

もらう予定です。児童に向けられたアーティストの言葉や投げかけはその瞬間には伝わらないことも多いでしょう。けれど、映像を見直した時に現在の自分の考えに重なったり、きっかけになるかもしれません。保護者や地域の方に平日の授業時間内で行われるプロジェクトの様子を見てもらうことは難しいですが、映像では児童の表情がどんどん柔らかくなっていく姿をいきいきと伝えていきます。この記録がこの先どのように伝わっていくか、私たちの楽しみでもあります。

チャレンジングというか、貴重な場になっていて、アーティストも子どもたちも学校もやったことがないような授業ができていないんじゃないでしょうか。学校には得意分野が違ういろんな子がいますが、そんな子どもたちが混じ

り合って、あんなに楽しそうに何かこう型にはまらない授業を体験できるのってすごく大切だと思うんです。それが、いろんな子どもたちの今後に良い影響を与えることができたなら、私たちが嬉しいですね。

大ちゃんにインタビュー！あれからどうしてる？

話し手：高口大将（名城大学経営学部3年）／聞き手：古橋敬一（元・港まちづくり協議会）



レーシングドライバーとしても活躍する高口大将さんは、港まちな出身。もちろん、西築地小学校6年生のときには防潮壁プロジェクトに参加しています。

そんな彼が港まちづくり協議会を訪ねてきたのは中学1年生の頃。今では立派な大学生となった高口さんにお話を伺いました。

— お久しぶりです！今はどうしてるの？

高口：大学生してます。レーシングドライバーで稼ぐのは、しんどい状況も見えてきて、エンジニアというのか、レースのいろんなデータを分析する仕事があって、ここ2〜3年はそれを目指してたんですけど…。

— けど？

高口：ドライバーとしての経験はもう17、8年くらいになるんです、3歳からなんです。以前は、負けても悔しくて「次、頑張ろう！」と思えたんですけど、急に嫌になることもあって。それだけ厳しい世界なので…。それで、レースの世界から少し離れてみるのもありかなあとか。

— うん。そっかあ…。

高口：でも僕、統計とかデータが好きで、そっち系の仕事もいいかなあって。半年くらいしたら、きっとレースに戻りたくなるでしょうけど(笑)。

— データサイエンス？ビッグデータ使って解析したりとか…。

高口：まさにそれ。大学では経営学部で、TikTokがバズるのを予測できないかみたいな研究をしています。うまくいけば、マーケティングにも活かれます。ちょうど今日その結果が出たところで、だいぶ精度が上がってます(笑)。

— すご、教えて欲しい!(笑)。でもなんでそんなに数字好きなの？

高口：昔から算数と国語は好きで…数字と言葉の関係というか、それこそレースでも車から得られるデータとレーサーのコメントって、ズレる時があるんです。で、それってなんでだろう？みたいなのを考えるのが好きで(笑)。マーケティングの世界でも実際に世間の人が言ってる声と得られるデータにズレがあったときに、なんで？どこからその誤差が生まれるんだろう？って考えるのが楽しくて。

— 研究者肌だね!

高口：そうですね?

— 追究するっていうか、その感じはあの

頃と全然変わらないなあ。大ちゃんがこの港まちポットラックビルに相談に来てくれたときのことを覚えてる?

高口：中学1年生のときですね。レースをやりたいけどどうしたらいいかって話で…。両親のおかげで3歳からカートをやらせてもらったんですけど、中学になってレースにかかる金額も自分で計算できるようになると、これはなんとかしなきゃいけないって。でもどうしたらいいかわからなくて、お金のことから、とりあえず大人に相談してみようって。

— 僕が最初に思ったことは、なんでこんなお金に縁がない人たちのところに相談に来たんだろうって(笑)

高口：しゃべりやすい人がよくて、僕の話をちゃんと聞いてくれるというか…。レースの世界では、僕のような悩みは当たり前すぎて、ちゃんと話を聞いてくれる人がなかなかいなかった。

— 流されちゃう。

高口：はい。でもやっぱり真剣に、聞いているフリじゃなくて、ちゃんと一緒に考えてくれる人って誰だろうって。そのときにパッと頭に浮かんだのが防潮壁プロジェクトで一緒にしたみなさんの顔だったんで。

— ここにいた大人たちは、大ちゃんにハートを鷲掴みにされてた(笑)

高口：とにかく、違う見方をしてくれる人に相談してみたかったんですね。もちろん、根本的な解決にはならなかったんですけど、やっぱりあそこで話せたことは大きかったです。

— 確か、当時のレジデンスアーティストたちと一緒に食事をして、話して。

高口：変わった国の料理を食べながら、いろんな方に話を聞いてもらったのを覚えてますね。

— うれしかったし、同時に背筋が伸びる思いがした。本気で夢をかなえたいと考えてるこの子のために、自分たちに何が出来るだろう？ってね。当時、はやり始めていたクラウドファンディングの話をしたり、何かツテはな

いかって…。その後も時々、相談に来てくれたんだよね。

高口：はい。高1で日本代表として世界大会への出場が決まって、本当にお金が必要だったので、少しでも自分の力でなんとかしたくて、いろいろと相談に乗っていただきましたね。

— 町内会長の早川さんが学区のみなさんに呼びかけてくれたんだよね。

高口：そうですね。日本代表が西築地から出るんだから応援しようって言うてくださって、結果的には80万円ぐらい。本当にありがたかったです。

— 大ちゃんは学区の会議で自分でプレゼンもしてね。立派だったよ。

高口：5年前のちょうど今ぐらい、冬の時期でしたね。

— いいよね、港まち。頑張る子が頼りたいと思える大人がいて、それに応えてくれる大人もいる。

高口：本当にそれで世界大会まで行かせてもらえたんで。でも正直、港まちづくり協議会って、何をしているのかわからなくて(笑)。アートとかまちづくりとか、一体どうやって食べてるんだろうって方たちがここにはいっぱいいて。でもそれを仕事にできるんだったら、その人たちの芯には何があるのかを知りたいっていう気持ちもあって。生き方の軸ってうのか…結構、勉強になりました。

— うれしい…というかそのリクエストに応えられていたのか不安ですが(笑)。やっぱり励まされていたのは僕らの方だったと思います。そういう若者が育ってることがこのプロジェクトの大事な成果のひとつなんだと思います。



交流の輪が広がっています!

トワイライトスクールでのアーティスト講座

2014年度から西築地小学校で多様なアーティストと共に防潮壁プロジェクトを実施してきました。そして、2022年度は新たな取り組みとして、放課後に児童が滞在する小学校併設の施設であるトワイライトスクールで、アーティストそれぞれの得意を活かした講座と児童の見守りを行いました。2023年度も継続して実施しており、様々な形で表現の楽しさを伝えています。



紙と糸であそぼう — 港まち手芸部

「港まち手芸部」を運営するアーティストの宮田明日鹿さんと、写真家の小川真希さん・山田憲子さんが、カラフルなチラシなどの紙と、様々な種類の糸をたくさん用意して、自由に作る講座を行いました。ほかの講座では得意な子がなかなか手が進まないのを横目に、次々と物を生み出して時間が足りないという子も。普段の講座では見られない様子が面白い、とトワイライトスクールの先生方からコメントをいただきました。自由ということは、目的を自分で見つける必要があります。慣れないながらも、回を重ねるごとにそれぞれのペースで、たくさんの材料とにらめっこしながら、自分の作るもの、使う素材を選択する身ぶりを得ていったようです。

宮田明日鹿 | ニット、テキスタイル、改造した家庭用電子編み機、手芸などの技法で作品を制作している。港では2017年から提案公募型事業「港まち手芸部」の部長を担っている。



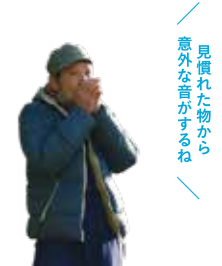
発想が柔軟！
面白い使い方がたくさん



ふしぎな音楽 — ICHI

イギリス在住のアーティストで音楽家のICHIさんと音を楽しむ講座を行いました。校庭に生えている草を使って行う草笛。コツを挿したらピーピー鳴らせるけれど、それまでが難しい…うまいかない児童は他のことをし始めますが、悔しいようで、ふとしたときにまた鳴らそうとしてみたり、吹けた子に教えてみたりと頑張ります。「草ってまずいね」「え〜おいしい」という声が聞こえたりもしました。ほかにも雨の音を風船とアルミホイールでつくり、耳を澄まして聞いてみる日など、身近なもので音を出す方法を知りました。児童からはICHIさんの独特なキャラクターが好評で、講座の終了後には一緒に走ったりして交流をさらに深めました。

ICHI | イギリス在住の音楽家。スティールパンや木琴、ギター、トランペットや様々な自作楽器、タイプライター、生活用品などを演奏し唄い、世界でパフォーマンスを行なっている。



見慣れた物から
意外な音がするね



ダンスアート — 辻将成

作家兼ブレイクダンサーのアーティスト・辻将成さんとダンスを通してアート作品をつくる講座を行いました。ストレッチや、リズムに乗って体を動かしたり、ダンスの動きで鬼ごっこをするなどしてダンスの動きを身近に感じる工夫が多くありました。制作では紙にインクを乗せて手の動きで感覚的に絵を描いていったり、足を使って絵を描いたり、と段階を踏みながら児童が徐々にダンスアートを楽しんでいく姿が印象的でした。正解がないため、間違いもなく、児童それぞれの作品にキャラクターが生まれていました。講座の終了後には「もっとダンスを教えて」「もう1枚描いていい?」と自主的にダンスとアートに取り組む児童も多くみられました。

辻 将成 | 空間と身体をテーマに活動するアーティストであり、現役のBBOY(ブレイクダンサー)。ダンスカルチャーとアートの文脈から制作・研究し、作品を生み出している。



ダンスの動きの観察！
絵の具を使って
見てみよう!



歌をつくろう — テライショウタ

ミュージシャンのテライショウタさんと一緒に、歌をつくる講座を行いました。最初はギターを演奏しながら歌うテライさんの様子を不思議そうに伺っていましたが、テライさんの伴奏に合わせて、「〇〇さん」「はーい!」と自己紹介をしながら歌いはじめると、一気に緊張が解けていきました。2回目以降は少しずつテライさんのギターの演奏にのせて、みんなで歌詞をつくっていきます。歌詞の中には、各自が好きな遊び、「しょうぎ、おにごっこ、オセロ…」などが加わり、とても楽しいものに。身体を動かしながら歌う子や、少し恥ずかしいけれど座って静かに歌う子も、楽しみ方はそれぞれ。「歌う」ことは、心の壁や緊張を解いてくれるコミュニケーションかもしれません。

テライショウタ | 名古屋を拠点に活動するミュージシャン。歌とギターのソロユニット「Gofish」、ハードコアパンクバンド「SIBAFÜ」など、積極的にライブを行なっている。



みんなの遊びを
みんなの歌に!

数字で振り返る2022年度データ

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN ANNUAL REPORT 2022 DATA

開催事業数・テーマ別事業パートナー数

項目	開催事業数	テーマ別事業パートナー数
○暮らす LIVES	123	23
△集う MEETS	26	65
□創る CREATES	43	66
名古屋市要望事業	5	5

港まちづくり協議会の活動参加者数

○ + △ + □ = 延べ33,001人

メディア掲載実績

2022年度のメディア掲載数は計51件でした。昨年度に比べると、WEBでの掲載数が2倍以上に増え、雑誌・広報誌でも取り上げられた一方で、新聞・テレビの掲載数は減少しました。時代に適したまちづくりが行えるよう、SNSなどを通じた広報活動には継続的に力を入れながら、私たちの取り組みをより多くの方に知っていただくためにはどうしたら良いかを模索し、周知に努めてまいります。

新聞	WEB	テレビ	ラジオ	雑誌・広報誌	合計
9	36	1	0	5	51

会計報告

2022年度の収入額は66,600,000円、支出額は61,535,701円で収支差額は5,211,161円となりました。支出内訳としては、「○心地よく安心な港まちで『暮らす』」が6,230,953円、「△魅力的でにぎやかな港まちに『集う』」が12,644,433円、「□みんなと港まちを『創る』」が42,660,315円（事務局運営費24,583,199円を含む）です。収支差額5,211,161円を名古屋市に返還しました。

項目	予算額	決算額
収入	66,600,000	66,746,862
支出	66,600,000	61,535,701
○暮らす LIVES	6,832,000	6,230,453
△集う MEETS	13,918,000	12,644,433
□創る CREATES	45,850,000	42,660,315
収支差額	0	5,211,161

(円)

港まちづくり協議会 2022年度報告書

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN ANNUAL REPORT 2022

2022年度 港まちづくり協議会メンバー（令和4年4月17日現在）

会長	早川 勝利（西築地学区連絡協議会推せん）
副会長	高崎 勇一（築地口商店街振興組合推せん） 長谷川 博久（名古屋市港区役所区政部長）
委員	小神 一夫（西築地学区連絡協議会推せん） 木村 清隆（西築地学区連絡協議会推せん） 澤田 伊佐男（西築地学区連絡協議会推せん） 松本 一男（西築地学区連絡協議会推せん） 濱田 秀和（名古屋市総務局総合調整部総合調整室長） 大谷 達哉（名古屋市スポーツ市民局地域振興部地域振興課長） 伊藤 剛史（名古屋市住宅都市局都市整備部名港開発振興課長） 中野 勝之（名古屋市緑政土木局港土木事務所長）
事務局長	小河内 雅行（名古屋市港区役所企画経理室長）
事務局次長	大西 未来
事務局員	小田 ビニシウス 井上 恵理 倉田 果奈 土屋 未久

制作	港まちづくり協議会
編集	大西 未来、井上 恵理（港まちづくり協議会事務局）
表紙作品	西築地小学校6年生（2022年度）
編集アドバイザー	竹内 厚（Re:s）
写真	倉田 果奈（港まちづくり協議会事務局）
デザイン	株式会社クーグート
印刷・製本	鬼頭印刷株式会社
発行	港まちづくり協議会 〒455-0037 名古屋市港区名港1-19-23 Minatomachi POTLUCK BUILDING TEL 052-654-8911 FAX 052-654-8912 E-MAIL info@minnatomachi.jp WEB www.minnatomachi.jp 2024年1月発行

WEB編集	倉田 果奈、土屋 未久（港まちづくり協議会事務局）
WEBデザイン	ブチグラフィックス

